

上方講談の現状

Present Circumstance of *Kamigata Kodan*
(Historical Narratives of Osaka Area)

森 田 憲 司
Kenji MORITA

はじめに

上方講談は変化の時期に現在あるにもかかわらず、筆者の知るかぎりでは、上方講談の現状について、芸評・時評はともかく、具体的なデータをも含んだ形で、総合的に叙述されたことがない^①。この文章では、一般にはすでにその存在すら知られることの少なくなった上方講談について、その概観と現況を記録にとどめ、さらに、将来への展望についても述べてみたいと考える。

さて、かつては京阪神それぞれに講談席があり、多くの講談師がいた上方講談なのだが、明治の末から衰退の一途をたどり、現在では12名の講談師を擁するのみである。実は、これでもういぶん増えたので、戦前のある時期からは実質2人であり、昭和40年代には一人だけという時期すら存在した。講談の退潮は東京でも同様で、かつて昭和42年に、一龍斎貞鳳が『講談師ただいま24人』という本を書いて話題になったが、上方にはその24人のうちの、たった一人しかいなかったのである（東京の講談師は現在約50人）。講談師の数こそ、いくらかは増えはしたが、現在でも講談の影の薄さは、東西を問わず変わらない。ある講談師は、自分達のことを「イリオモテヤマネコ」に例えたというし^②、旭堂小南陵が平成元年7月の参議院選挙に立候補したとき、当落はともかくとして、これで「旭堂」と書いて、「きょくどう」と読ませる講談師の一群が大阪にいるということが、全国に宣伝できるだけでも意味があると、冗談混じりに語ったと伝えられるのも、うべなるかなという状況なのである。

ところで、この文章は、昨年度の奈良大学総合研究所の研究プロジェクトの一部として筆者が担当した「上方講談における奈良」というテーマの報告として書かれたものである。本題に入る前に、研究所プロジェクトとしての上方講談調査とこの文章との関係について触れておきたい。

奈良大学図書館には、「奈良関係資料」として一括保管されている資料群がある。その収集は現在も進行中で、本稿執筆の時点で、6千点近くになるが、筆者は、その収集に関わってい

平成5年9月6日原稿受理

く中で、収集への視点の一つとして、「奈良を見る目」という言葉が、ある時期から脳裏に絶えず存在するようになった^④。この言葉の持つ範囲には、観光地としての奈良の位置づけや、個々の観光地への評価の時代による変遷といった問題もあるが、それとともに、各分野の文学作品における奈良のイメージが、大きな比重を占める。さいわい、近代文学をはじめとする奈良関係の作品については、国文学科の諸氏による、収集解題の努力が行なわれており、それについては、本誌においてもその一端がうかがえるところである^⑤。

それでは、大衆芸能の分野での奈良についてはどうなのか。上方講談の世界といささかご縁のある筆者は、この点についての調査を、講談を材料として行なうことを試みることにした。形に残ることの少ない話芸の中で、以下に紹介するように、過去のものではあるが、活字化された文献がかなり存在し、しかも、いくつかの機関で、まとめて保存されていること、かねてからの上方講談のメンバーの皆さんとのお付き合いのおかげで、聞き取り調査に協力をいただき、あるいは疑問点に答えていただくことが可能であると考えたこと、などがその理由である。しかし、現実の問題として、1年間という限られた時間の中で、上方講談の中における奈良像について、十分な調査を行ない、答を出すには至らなかった。ここでは、東京の講談と比べても、また同じ上方の話芸でも、落語に比して知られることの少ない上方講談の現状について記述することによって、さらなる調査の進行のための基礎とするとともに、将来のための記録ともしたいと考えるのである。ただし、この文章では、講談の歴史や芸について論ずることを目的とするつもりはなく、あくまでも上方講談の現状を書き留めることを目的とする。また、本稿においては、故人、現役を問わず、敬称は省略させていただいたことをお断わりしておく。

1. 上方講談略史

ア：明治以降の上方講談

まず、明治以降の上方講談について簡単に述べることから話を始めたい。ただし、上にも書いたように講談の歴史そのものは本稿の目的ではなく、最後にリストを掲げたような参考文献を材料に、現状を知る上での前提として必要な範囲を記述するに止める。なお、上方講談の歴史に関して、とくに有用な文献を挙げておくと、雑誌『講談研究』に、昭和28年から29年にかけて連載された、二代目旭堂南陵の「大阪講談界今昔」があり、また現三代目旭堂南陵（以下とくに代数を記さない場合は、氏を指す）にも、雑誌『上方芸能』に、第7号[1969]から44回にわたって連載された「明治の上方講談師」^⑥と、「南陵師匠聞書」（聞き手青木繁・神沢和明、『上方芸能』113[1993]-）とがある。

さて、旭堂南陵著『上方講談三代記』の「まえがき」（注5参照）によれば、「明治初年から、中頃まで、大阪の街には蹴つまづくほどの講談席があり、同じかずの上方講談師が生活していた」^⑦とあり、父の二代目南陵が講談と関わりはじめた明治25年頃の話として、「講談師は50人ばかり、席は3,40軒あった」とする（同25p）。また、吉沢英明編『講談明治編年史』（編者刊、1979）に収集された新聞記事によれば、明治20年には、大阪4区2郡の講談師が43人とあり、明治34年の大阪の講談席の数が43席とある^⑧。さらに、やはり『三代記』には、時

期は明記されていないが、この時代の上方講談界の面々の名前が列記された箇所があり、大阪だけで50人弱、それに京都で3名の名が挙げられている（p60以下）^④。現在の上方には講談の定席はもはやなく、講談師の数が、やっと2桁になったと喜んでるのは、ずいぶんかけはなれていると言わなければならない。ちなみに、同じ明治2,30年代頃の東京では、講談師の数は3,4百人いたという^⑤。

しかし、それからまもなく、この上方講談が衰退に向かい、明治末には、旭堂家の一道（初代南陵の隠居名）、南陵（二代目）の2人のみが気を吐くという状態となってしまった^⑥。一道は、明治44年に没し、これ以後上方講談と言えば南陵という状態が、戦後まで続くこととなる。そして、その間に南陵の息子の小南陵、すなわち現三代目南陵が講談師となっている（大正7年生れ、17才で初舞台、昭和15年に二代目小南陵で真打）。

こうした講談の衰退の原因として、これまでからいくつかの点が指摘されているが、一つには、新興芸能としての浪花節、さらには活動写真の出現があり、また大看板が物故したものの、後継者が育っていなかったことも原因となった^⑦。さらに、明治32年に大阪でペストが流行し、衛生状態が悪いとされた講談席が、次々と営業停止に追い込まれ、これによって、席数が半減したことも影響した^⑧。このようにして、明治から大正へと時代は遷るのであるが、この時期の上方講談については、旭堂南右（現小南陵）の「講談－浪花節と落語のはざまの」（『上方芸能』39、1975）が、よくまとめて記述している。また、1911年から刊行が開始される『立川文庫』をはじめとする、「書き講談」の流行で、この時期も講談が盛況であったと錯覚されそうであるが、それは、講談師によって演じられる講談とは別物であり、むしろ、家に居ながら読める「書き講談」の出現は、講談衰退の一因とされる^⑨。

イ：戦後の上方講談

昭和に入ると、戦前から戦後にかけて、ずっと南陵（二代目）、小南陵（現南陵）2人だけの時代が続く（正確には、戦後になっても他に二代目の弟子の南陽、南鶴の2人がいた）^⑩。戦後の小南陵は、ともに「さえずり会」を結成した若手落語家達と行動をとともにすることが多かった。現在でこそ隆盛を誇る上方落語であるが、当時は、全く衰退しており、後に四天王と呼ばれる、笑福亭光鶴、桂米朝、桂小春、桂あやめ（それぞれ故六代目笑福亭松鶴、三代目桂米朝、三代目桂春団治、五代目桂文枝）が、入門し、あるいは活動を開始したばかりであった^⑪。こうしたことから、この時期の小南陵の活動については、松鶴の「戦後上方落語界の裏話」（『上方芸能』7-10、1969）に詳しい。そして、昭和40年には、二代目旭堂南陵が89才で死去し、ついに現役の上方講談の演者は、彼ただ一人となってしまふ。

小南陵は、翌41年に三代目南陵を襲名はするものの、やがてブームを迎える上方落語とは異なり、講談の勢いは盛りかえさず、一人孤塁を守る南陵は、ありとあらゆる機会をとらえて講談を広めることに努めることになる。当時、雑誌『上方芸能』が、その第6号を特集「危機に立つ大阪の講談」（1969）として取り上げており、とくに一色宗彦「張り扇一匹 南陵師匠を“最後の殉教者”にしてはならない」が、この間の状況を論じている^⑫。

こうして、南陵がたった一人の現役講談師という状態が、昭和47年の、現小南陵（実際にはそれ以前に学生時代から師事）、ついで左南陵の入門まで続くことになる。言い換えると、南陵を総帥とし、その弟子達（孫弟子を含む）から構成される、現在の上方講談界の体制は、この昭和47年に始まったと言える。一番最近に入門・デビューした、旭堂南太平洋（小南陵の弟子）まで12名、これが上方講談の現有勢力であり、上方講談協会の会員である^⑨。

2 上方講談のメンバー

明治以来、上述のような経過を経て、12人の講談師からなる、現在の上方講談界へと至ったわけである。次に、現在の上方講談のメンバー達について見ていきたい。この12名について系譜化すると、次のようになる。それぞれの講談師については、「上方講談師名鑑」と題して、簡単な紹介を文末に掲げておいたので、参照していただきたい。また、この間に入門したが、すでに廃業している6名についても、名前をそこにあげておいた。

上方講談師系図



なお、上方講談の世界が落語と違う点の一つが、「真打」制度が存在することである。上方落語が東京のそれとはことなり、前座、二つ目、真打という明確なランクを制度として持っていないことはよく知られているが、講談の場合は、東京の講談と同様に真打制度を持つ。現在の真打は、上の系図で言えば、南陵以下南北までの6名である（彼らの昇進の時期については、資料の「上方講談師名鑑」参照）。

また、講談師の年齢構成を見てみると、師南陵は別にして、世代的に3つのグループに分けることができる。すなわち、小南陵と左南陵、南左衛門・南麟・南北、南華と南海である。すなわち、たった一人の上方講談師となった南陵に入門した世代、昭和50年代前半に講談道場から南陵に入門し、現在真打となっている40才前後の世代、昭和60年代に入門した若手の3つの世代である。

このように、プロとして講談の世界に飛び込む者が増加してきた背景には、「講談道場」の存在がある。講談道場は、講談の後継者のみならず、よき聞き手を養成することを目的に、アマチュアを対象に無料で講談を教授する会で、「話芸研究会」という名前で、昭和50年1月、

当時南右の現小南陵を中心に、日本橋の谷口歯科センタービルを会場に始められた。その後、会場を「芸能を楽しむ会」^⑧に変えて、現在も毎週木曜日に開かれ（同じ会場で「上方講談を聞く会」のある第2木曜を除く）、プロの講談師が交代で指南役をつとめている。南左衛門以降に入門した講談師は、小南陵の2人の子供を除き、すべてがこの道場の出身者である。アマチュアの道場生達（高校の先生、アナウンサーなどさまざまな職業の、中学生から80才までの幅広い世代の人々で構成される）も、男は太閤堂、女はひさご亭という共通の屋号を持ち、年に2、3回程度、同じ会場で発表会が開かれている。

このようにして、上方講談の講談師の数は再び増えてきたが、そのすべてが旭堂一門であることは言うまでもない。筆者がこれまでに書いた上方講談についての文章でも、何度か触れてきたことであるが、現在の上方講談の最大の特徴は、流派が旭堂一門しか存在しないことなのである。明治時代の上方講談には、たとえば京都の神官の出身で、神道講釈を得意とした玉田派のように、さまざまな系統の講談が存在していたのとは、様相を異にしているのである。そして、この旭堂派の特徴の一つが、東京の講談界とのつながりであろう。二代目南陵は、大阪天満の人であるが、最初に付いた師匠は東京から来た南窓、それから改めてもともと東から流れて来た初代に付き、さらにその芸の成長期には東京で修業している。旭堂家の講談に東京の風があることは、現南陵自身、「旭堂の本流は東京なのである」と述べ、「上方講談」という表現自体にも疑問を呈しているくらいである^⑨。

3 上方講談の公演

すでに書いたように、南陵は一人だけの講談師であった頃から、講談を演ずる機会、あるいは場の実現のための努力を重ねてきた。そのうち最も有名なものに、「南陵会」がある。これは、昭和41年に彼が始めたもので、毎月2回の例会を開き、最初は200人もの出席者がいたというが、やがて客が減りはじめ、ついには3人という回まで出現するに至り、43年には中断してしまう^⑩。しかし、翌年には再開し、現在も毎年正月一日には、大阪城内の豊国神社で講談初めの会を開いている。そして、南陵は、南陵会を基礎に、各種のテーマのもとにイベントを企画する。その最初であり、もっとも話題を呼んだのが、昭和50年の大阪落城360周年記念会と銘打った「徳川家康をののしる会」であった^⑪。この会は、その後も繰り返し催され、最近では、平成4年5月7日に開かれている（会場、森ノ宮ビロティ小ホール）。

しかし、上にも書いたように徐々に講談師の数も増えていき、安定した発表の場が必要となる。昭和52年には、「上方講談を聞く会」が、54年には「そば寄席」、55年には「オレンジ講談」が、それぞれ始まり、いずれも現在まで続いている。こうして、現在も続く「聞く会」形式での講談上演の場が出現していった。それぞれ月に1回有るや無しではあるものの、研鑽の場として、講談を定期的に公演する場が、存在するわけである。平成5年現在、定期的に行なわれている講談会は、次の通り。

- 1 上方講談を聞く会 毎月第2木曜 会場：芸能を楽しむ会（大阪ミナミ）平成5年3月で176回

2 オレンジ講談 奇数月第4火曜 会場：阪急ファイブオレンジルーム（大阪キタ）平成5年3月で75回

3 そば寄席 偶数月第2火曜 会場：東京そば正家（神戸三宮）平成5年3月で84回

なお、「上方講談を聞く会」は南左衛門、「オレンジ講談」は南海が、「そば寄席」は小南陵が、それぞれ責任者となって運営されている。

また、個人的な会としては、南北は、自らの主催で豊中市で「南北さんの旭寄席」を開いており、平成4年末には、10周年・60回記念興業をおこなったし、南左衛門が、生駒で「生駒寄席」を、南鱗が八尾で「つつみ寄席」をそれぞれ主宰している。

最近の講談会の活況については、筆者は、先だって『上方芸能』にも、一文を寄せたが（「元氣な上方講談界」、『上方芸能』115、1993）、数年前までは、多くの場合観客は一桁で、出演者の数と観客の数がいい勝負ということも珍しくなく、たった一人だけ、ということもあった。それが、最近では20人は当たり前、30人を越える会も珍しくないという勢いとなっている。その理由などについての分析は、拙文を参照していただくとして、ここ何年かの変化は、この間講談界にかかわってきた筆者などには、大げさに言えば、隔世の感すらある。

こうした最近の講談会の隆盛の理由の一つが、プログラムを魅力あるものにしようという努力にあることは間違いなく、この点にだけは触れておきたいと思う。それは、南陵の出演と特集の設定である。すなわち、平成3年の夏頃から、会の構成が変化し、南陵が、前座の南海（後に入門した南太平洋も）とともに、「オレンジ講談」と「聞く会」に毎回出演することとなり、また、演目の構成では、各回ごとになるべく特集、共通テーマ（最近では、細川特集など）を設けるようになったのである。これらは、聴衆にウケやすい一般的な演目に偏ることなく、さまざまな演目を高座にかけることや、師南陵の口演を聞く機会を増やすことにより、上方講談の持つ財産をより多く継承していくことを目指したものであると言えよう。そして、それは後述する演目とその継承の問題ともかかわる。

このように講談会が盛況になったきっかけになった出来事と言えるのが、平成2年3月の5日連続親子講談会であった（3月13日～17日）。これは当時、真打あるいはそれに準ずる立場にいた、小南陵・左南陵・南左衛門・南鱗・南北の5名の講談師が、森ノ宮のピロティ小ホールを会場に、5日連続で師匠の南陵と親子会を開くという画期的な試みであった。しかも、南陵がお家芸である「難波戦記」を5夜続け読みした。この会は、5日ともほぼ会場を満席にする盛況で、人々の上方講談への関心が全く消滅してはいないことを示す結果となったのである。ちょうどこの頃から、マスコミに上方講談が登場する機会も増えだしている。

また、それに呼応するように、この前後から、従来から独演会を重ねていた小南陵はもとより、他の上方の講談師達もそれぞれに年1回程度の発表の場を持つようになる。例えば、昨平成4年から5年春にかけて開かれた、独演会は次の通り（*は会の特徴と言える点）。

平成4年

3.14：第10回旭堂小南陵独演会「大阪国際交流センター小ホール」

*神道講釈の復元 [安部晴明伝]

4.25：南北の挑戦Vol.1 [近鉄小劇場]

*ミュージカル講談

11.18：神田山裕・旭堂南麟二人会 [アピオ大阪小ホール]

*東京の神田山陽門下との二人会

11.22：第3回旭堂南左衛門独演会 [オレンジルーム]

平成5年

4.10：第11回旭堂小南陵独演会 [テイジンホール]

*絵解説教の復元 [冥土の旅日記]

4.17：南北の挑戦のVol.2 [近鉄小劇場]

*ミュージカル講談

この他に、小南陵は、南右時代の昭和49年から、若手の落語家と「ぐるーぶ寄席あつめ」を主宰し、寺や公共の会館などを利用して、京阪神各地で「地域寄席」を開き、実演の場を確保してきた^⑥。これは、彼以外の若手の講談師にも修業の場となっている。ただし、必ずしも講談が目的で来ているわけではない聴衆を相手にするので、「越の海勇蔵」、「荒大名の茶の湯」、「真柄のお秀」といった、馴染みやすい、特定のネタを演ずることが多い傾向にあることは否めない。

そして、もう一つの場として最近増えてきたのが、行政との関わりである。上方講談には、上方講談協会を窓口として、昭和54年から、大阪府の「芸術文化事業奨励補助金」の1つとして、助成金が出されているが^⑦、それとともに、最近では、行政あるいは第三セクターが関わる講談の会がふえてきた。大阪府の関与した最近の例としては、府民劇場で「戦国と大阪合戦物語」（平成4年8月30日 鐵通社 [泉佐野市]）、なにわ塾の「再現 これがなにわの講釈場だ」（平成5年3月23日 大阪府立情報文化センター [北区]）などがある。また、市町村レベルでも、河内長野市のラプリーホール（主催、河内長野市文化振興財団）や、門真市のルミエールホール（主催、門真市文化振興事業団）などが、講談会を催している（うち、門真市は3ヶ月に1回の定期開催）。

地域寄席をはじめとして、このようなさまざまな形で講談を演ずる場が作られねばならなかった背景には、この時期に、演芸場が次々閉鎖されていったことも関係している。小南陵の修業時代には、トップホット（梅田）、新花月（新世界）、神戸松竹などに、月に10日から20日は出演の機会があり、漫才や落語をはじめとする他の演芸に混じっての出演（当然講談は客にとっては期待される演目ではなかった）によって、ずいぶん鍛えられたというのが、今はそうした場はない。

4 上方講談のネタと修業

講談の演目がどのくらいあるかは、なかなか難しい。現存する速記本の種類で見ると、

上方講談速記本の収集家でもある小南陵の知る限りでも2千を越えるという。また、明治の大坂の講談速記本の速記者として活躍した丸山平次郎が、速記者として名を連ねている速記本だけで474冊あり、その門下の山田都一郎のものが150冊あるという⁹。もちろん、このうちに、現在実際に上演するだけの意味のある演目がどのくらいあるかは別であるが、それにしても、1冊の速記本は200頁強、これで10回あまりの口演の速記を収めているから、1回を1演目とすると、それだけでもずいぶんな数になる。あるいは、旭堂家の演目の中心は、「太閤記」、「難波戦記」、「水戸黄門」であるが、このうち「太閤記」だけでも、明治時代の講談師玉龍亭一山は、1月1日の秀吉の誕生から語り初め、8月ひと月は休んで、12月31日大晦日に秀吉の死を以て終わったというから、300回分以上のネタとなる（しかも、当時の一席は今より長講である）。あるいは、先代南陵が、新聞「新関西」に週1回連載した、「難波戦記」のノヴェライゼーションの「後日の豊臣」（実際には子息の現南陵の筆になるという）は、手元のコピーだけでも65回分ある。現在の落語が、限定されたネタを多くの落語家を使い回している状況にあることは、しばしば指摘されるが、講談の場合、発掘の努力さえ怠らなければ、無限に近い材料があると言えそうである。

このように無限に近い数の速記本というネタの宝庫を抱えている上方講談にとって、より多くの聴衆を引きつけていくためには、すでに完成度が高く、多くの聴衆を喜ばせることのできるネタの再演とともに、どれだけ目新しい話を、「こんな話がありますけど、知ってはいりますか」と、高座にかけていくことができるかが、大きな課題であろう。それには、より多くのタイプの異なる演者の出現が必要となることは確かである。

ただし、最近の講談会での、珍しい作品の発掘の努力を見ると、同工異曲の話や、上演されていないのもっとも、という場合も少なくないことも事実で、この点は他の古典芸能の場合と同様のようなのである。

一方、ネタの問題に関して落語との関係を見てみると、例えば、明治時代に活躍した三代目笑福亭松鶴が、講談師としては竹山人という名前を持っていたように¹⁰、かつては境界はあいまいで、現在のように、「某々は落語家、某々は講談師」といったジャンル分けが厳密に存在していたわけではない。こうしたことから、ネタの相互移動ということは、日常的に存在し、落語の方では講談から来た題材を、「釈ネタ」と呼ぶ。一例をあげると、上方落語でよく演じられる「花筏」は、講談では「間違いの相撲」と題して演じられる。また、遅れて成立した浪花節とのネタの関係については、注11に引いた小南陵の文章を参照されたい。

また、どちらが先ということはなくとも、同趣向のネタは存在する。小南陵が好んで演じる「黒雲お辰」は、三門博の「唄入り観音経」と同趣の話であるが、舞台設定を異にして、大和の黒木村の百姓の話とする。この演目は、小南陵によれば、彼が明治の速記本からリライトしたものだということである。また、「蘇生」という話は、明治の新聞に載っていた話だというのが、東京のそれとは異なって、上方講談では、大和の郡山の話として演じられる。

このことは、講談のいわば「固有名詞性」¹¹と関わる。すなわち、落語と講談との違いは、中に流れる言葉のリズムをはじめ、いくつか存在するが、その一つに、落語が長屋の八さん、

喜い公といった、特別の名前を持たない、一般人を主人公にするのに対し、講談の場合、『太閤記』の秀吉はいうまでもなく、『難波戦記』の真田一族や木村長門守、あるいは、『大塩政談』の大塩平八郎（東京では大岡政談となるところが、大阪では大塩政談になる）という風に、特定の固有名詞を持った人物が、平野（現大阪市平野区、平野の地雷火）、般若寺（現奈良市、般若寺の焼討ち）といった、限定された、しかも聞き手がよく知っているであろう空間の中で活躍するのが普通である。それ故に、聞き手とその空間との間にシンパシーがなくなると、話そのものが成立しにくいという特徴を持つ。したがって、現実の上演に際しては、その土地に適した演題を選ぶのはもとより、上演される地域の人になじみのある固有名詞（人名・地名）に、登場人物・地名などを変えて演じられることになる。

講談と言えば、歴史上の人物のエピソードが主な題材で、場合によっては、話の内容そのものも誰でも知っているだけに、一度できあがった話は少しもくずさずに伝承されているように思われがちであるが、実際には、その場でかなり内容が（場合によっては主人公の名前さえも）、変えて演じられることが珍しくないのである。

それでは、現実にネタはどのように伝承されていくのか、昔から講談師は、「点取り」というものを、その最も大事な財産としていた。「点取り」とは、演者が手元において上演の参考にするため、話のポイント、人名地名などの固有名詞や年代などを書き記しておくもので、演者自身にしか役に立たない心覚えである点で、いわゆる台本とは違う。明治時代に地方を廻った講談師達は、この点取りを風呂敷包にして背負って歩いたという⁹。現在でも、講談の修業は、師匠が、その弟子に適したと考えられる、あるいは彼が希望した演目を、手元の点取りからひっぱりだし、弟子の前でそれを語って聞かせ、弟子はそれを聞き覚えるという形を取るのが本来である。小南陵は正式入門以前の学生時代に、南陵のもとで月に一話のペースで、こうしたやり方で話をつけてもらったという。もちろんこの当時は、テープの使用は許されなかった。そのかわり師匠の南陵の方も、機会があれば現在稽古をしている演目を舞台にかけ、ソデで控えている小南陵が聞く機会を増やしてくれたともいう。もっとも、最近では、師匠が語ってくれる段階でテープに取ることや、当代・先代のテープ、さらには兄弟子の実演のテープを参考にすることも行なわれているようである。

ネタの問題は、師匠からの伝承にとどまらない。小南陵は、彼自身が収集した明治の講談速記本から今日の上演に耐える題材を探し、そこから話を再構成している。上に挙げた「黒雲お辰」はその例であるが、さらに場合によっては、講談以外の世界にも材料を求めて、演題を増やし続けている（例としては、「碁石」がある）。彼は、より多彩な演目を上方講談に取り込むことを目指しており、それが上方講談をより魅力的なものにする道であると考えているようである。

5 上方講談の資料

上方講談の現状について記述することを目的とした本稿の主旨とは離れるが、奈良と講談との関係という本来の研究テーマに関連して、上方講談に関する資料のありようについても触れ

ておきたい。

ここで言う講談の資料には、2つの種類がある。すなわち、1つには、各講談師の履歴や寄席の消長などといった演芸史の文献であり、もう一つは、講談の内容そのものを伝えてくれる資料である。前者については、当時の新聞類が有用な資料となるが、各種の新聞から講談関係の記事を集成したものとして、『講談明治編年史』をはじめとする、吉沢英明の一連の労作があり（上方・東京双方を対象とする）、講談に限らず各種の演芸に及ぶものに、倉田喜弘編『明治の演芸』全8冊（国立劇場芸能調査室、1980-87）や、樋口保美「明治の大衆芸能史 大阪朝日新聞にみる動き」（『上方芸能』55号〔1978〕から連載）がある。

一方の、講談そのものを伝えてくれる資料であるが、語りの芸能である講談は、当然の事ながら、演ぜられたその場で消えていく。しかし、それを文字の形で伝えるものに、すでに講談の略史のところでも紹介した、「速記本」がある。上方講談速記本の書誌的研究として最もまとまったものとしては、未完ではあるが、旭堂小南陵「上方講談と大阪の出版文化1-13」（『上方芸能』83-95、1984-87）があり、この文章でも参考とするところが多かった。また、東京の資料に重点が置かれているが、椎名靖「読み物講談の足跡1-7」（『講談研究』150-6、1966）が、速記本から始まり、戦後のカストリ雑誌に至る、文字に書かれた講談の歴史についての要を得た概説で、役に立つ。

速記本とは、講談や落語を、当時新聞記者を中心に広まりつつあった速記術で書き取って出版したもので、明治10年代末から始まる。速記本の形態は、大きさは菊版、表紙は多色刷り、また巻頭に多色木版画が1枚折り込まれているのが、普通である。大阪、東京の双方で出版されたが、大阪の代表的な出版社としては、巖々堂、立川文明堂、岡本増進堂などがあつた。元来が消耗性の強いものである上に、出版社の数も多く、その上版権の売買や、同じ講談の本をタイトルを変えて出版するなどの事があり、その全体像を書誌的に把握することは難しいが、上にも書いたように上方講談の速記本の数は、知られているだけでも2千を越えるという。さらに、同じ頃から、講談や落語の速記を連載する雑誌も出版されるようになる。代表的なものとしては、大阪では『百千鳥』、『ことばの花』、東京では『百華園』などがあり（百千鳥、百華園とも、明治22年創刊）⁹、また、新聞の付録として、講談の速記が別冊に付けられることも多かつた。これらもまた、講談資料として貴重なものである。一方、その後刊行されるようになる『立川文庫』に代表される文庫本は、講談の実演というよりは、リライトであり、速記本とは、資料としての性格をやや異にする（もちろん速記本も、厳密な意味での速記ではなく、読みやすくするための手は加えられている）。

さて、上方講談関係の資料のうち、速記本や講談速記雑誌の保存の現状であるが、これらの速記本は、主として貸本屋で借りて読まれるものであつたようで、現存する速記本にはしばしば貸本屋の印が捺されたり、耐久性を強めるために太い糸でかがり直されたりしている。そして、多くの人に読まれたのか、保存状態が良くないのが普通である。また、講談のような大衆文化に関わる文献については、大学はもとより、公的機関においても、これまで収集の対象にはなつてこず、個人コレクターの収集に待つよりなかつた。しかし、近年、上方講談を大阪の

誇るに足る伝統文化として見直す動きもあり、いくつかの図書館が、明治期の講談速記本や雑誌類を、収集するようになってきた。代表的な収蔵機関としては、大阪では大阪府立中之島図書館、関西大学図書館、東京では国立演芸場資料室（東京のものが多く）、国立国会図書館があり、このうち、関西大学の所蔵分については、『関西大学所蔵大阪文芸資料目録』（同館、1990）に著録されている⁹。その他天理図書館にも収蔵されていると聞かすが、未だ調査の機会を得ず、また既刊の冊子目録には見えないため、その状況をつまびらかにしない。

おわりに

以上、上方講談の現状を見てきた。昭和40年代には南陵一人だけとなった講談師の数は、今では10人を越えた。観客動員もわずかずつだが上向きの傾向が続き、少しずつ、現在の大阪の話芸としての講談の地位は復活しつつある。基本的には、今後もこの流れは続くであろう。ただし、歴史の流れのもたらした結果として、現在の上方の講談師は、すべて南陵の弟子で、旭堂一門である。したがって、師南陵という存在が、規範として目に見えて存在し、その枠の中にいるかぎりにはそれは上方講談であると言える状況にある。しかし、小南陵をはじめ、弟子の中に40才を越える者が増えてきた今、それぞれが自分の講談を作り出す時期に近づきつつある。それは、必然的に、上方講談が分化していく時代の到来を意味しよう。より多くの講談師が出てくることによって、層の厚みが芸の多様性をもたらす、そういう時代が来るであろうか。

今回、上方講談について書くにあたって、インタビュー、資料・データの提供、さらには講談会が終わってからの雑談など、上方講談を支えておられる講談師の皆さんのご助力に負うところが多い。この場で、あらためてお礼を申し上げたい。（93年9月2日了）

注

- 1 個別の上方講談界の出来事や時評については、『講談研究』や『上方芸能』に、相羽秋夫氏が、寄稿している。
- 2 「講談師のおいしい仕事」（『AERA』1991年1月22日号）。
- 3 森田憲司「奈良大学図書館の奈良関係資料収集」（『季刊食』42、1991）。
- 4 浅田隆「集書目録—奈良にかかわる近代文学」（『奈良大学総合研究所報』創刊号、1993）、浦西和彦他編『奈良近代文学事典』（和泉書院、1989）
- 5 この連載は、のちにまとめられて、『上方講談三代記 明治・大正の巻』（夏の書房、1982、以下「三代記」と略）と題して出版されたが、単行本の方は、タイトルのように、大正時代、ラジオへの出演で終わっており、内容的にも、連載の方が豊富である。また、その他、先代南陵がかつての上方講談について回顧した文章としては、桂米朝『上方落語ノート』（1978）に、「二代目旭堂南陵聞き書」がある。
- 6 この「まえがき」にある、講談席と同じ数の講談師が生活していたというくだりについては、説明が必要かもしれない。当時の講談席では、出演者は、前座と真打の先生との二人だけというのが普通だったからである。
- 7 本文にも書いたように、これらの数字は、吉沢英明編『講談明治編年史』所引の新聞記事による。それによれば、明治20年は、「浪華新聞」10月1日号、明治34年は、「時事新報」5月4日号。
- 8 また、『講談明治編年史』所引の明治36年12月31日付の「大阪新報」の記事には、当時の大阪の主な講談席の出演者が紹介されている。

- 9 東京についても、『講談明治編年史』所引の記事による。講談師の数を挙げた記事を以下に列挙すると
- 明治15 府中取調 軍談331人(朝野新聞2.21)
- 明治20 府下取調 講談429人(やまと新聞5.14)
- 明治22 府下取調 講談399人(やまと新聞1.8)
- 明治33 鑑札を有する者400名以上(時事新報1.11)
- 明治39 警視庁管内 講談100人(電報新聞1.10)
- 10 中央新聞明治43年3月21日
- 大阪の講談界は講談師に倅な者のない故もあらうが、近頃は浪花節に勢力を奪われ甚だしく衰頽を來たし従来の講談定席は大半浪花節の席に変わって講談師は浪花節と合併とは名ばかり其実体の好い居候の形であるが独り旭堂一道南陵父子一派ばかりは毅然として浪花節と合同せず二三の席を根拠に苦戦奮闘を続けて居る(この記事も吉沢氏の『講談明治編年史』所引の新聞記事による)
- 11 旭堂南右(現小南陵)の「講談—浪花節と落語のはざまの」は、次のように言う。
- その浪花節のネタは義士伝しかり侠客伝しかり、みな講談ネタ、“釈ネタ”であった。聞き手の側に立った場合、講談と同じネタをやり、しかもそれに面白おかしく節がついているとしたら、当然浪花節の方をとるであろう。……初期の浪花節は、節以外の文句の部分は、かなり講談に近かったと思われる。要するに浪花節は講談のジャンルを覆いつくしたわけである。
- 12 「三代記」142p。
- 13 この点については、小南陵が前掲「講談—浪花節と落語のはざまの」の中で述べている。
- 14 戦争が始まると、南陵は、昭和15年に召集され、中国戦線で軍隊生活を送ることとなる(昭和21年6月復員)。戦中のことについては、南陵は、「戦争と講談師」といった演題で、講談会でしばしば語るとともに、文章にもしている。また、この二人の弟子については、「明治の上方講談師」の中で言及されている。
- 15 この他に、この当時行動をともにしたメンバーとして、大阪市交通局の職員のみままで、落語家専業とはならなかったが、南陵会などの活動に終始協力し、また地域寄席のはしりとなる岩田寄席の主宰者としても有名な、桂米之助の名を挙げておかねばならない。
- 16 南陵自身、当時自身の置かれていた状況について、「人間の欲と恐怖を主題に 講談の描こうとするもの」(『上方芸能』6・特集「危機に立つ大阪の講談」、1969)の中で、次のように書いている。
- (前略)この人達(弟子)にまずわたしは講談は話術にすぎないと教える。どこへでも出て、何でもしゃべらねばならない。だからわたしも事話術に関するのなら何でも引き受ける。(以下、企業人相手の講演について述べ)キャバレーで頼まれ、女の子の踊りの間にはいり、三分と三分、つまり六分で川中島合戦を読み切ってしまう。奇跡のような早業である。(以下略)
- 17 上方講談師の組織として、「上方講談協会」がある。とはいっても、上方講談の場合、全員が南陵一門で、当然この協会の会員でもあり、東京の講談界で繰り返されたような、分裂再組織といった現象は存在しない。協会ができたのは、南陵によれば、昭和24年12月14日(ちなみに義士の討ち入りの日)のことで、戦後に繰り返した上方講談の滅亡の危機が報道されたので、それに対して、講談の健在を誇示するために設立したといい、昭和59年には、35周年記念講談会を開いている(旭堂南陵「上方講談協会35周年」、『講談研究』369、1984)。しかし、実際に組織として機能するのは、何人かの弟子ができてからで、本文にも書いたように、大阪府からの補助金の窓口としての役割りが大きい。言うまでもなく、会長は南陵であり、副会長は小南陵、会計は南嶽である。
- 18 まぎらわしい名前であるが、ミナミの旧大劇裏にある内川ビル3階の演芸用小ホールである。
- 19 旭堂派と東京との関係について、旭堂南陵は「小南陵襲名について」(『講談研究』288、1978)で、次のよ

うに述べている。

ところで上方講談という名称であるが、これもおかしなものだ。初代の旭堂南陵は江戸っ子の講談師で、旅をまわっているうちに大阪に居ついた。二代目南陵はその弟子となり南花、二十歳のとき東京へ行き、三代目神田伯龍のもとで修業、名が龍生、ついで小伯龍となり、二十四歳で大阪に戻って小南陵を襲名した。私はその南陵について十七、八歳の自分から教えられた。だから旭堂の本流は東京なのである。

- 20 南陵会の経緯は、『上方芸能』6特集「危機に立つ大阪の講談」（1969）の一色宗彦「張り扇一匹 南陵師匠を“最後の殉教者”にしてはならない」による。
- 21 「徳川家康をのしる会」などのイベントについては、相羽秋夫「南陵会の動き」（『講談研究』269、1976）に詳しい。
- 22 「地域寄席」にも消長があるが、長く続いている代表的な寄席としては、御旅寄席（堺市）、田辺寄席（大阪市阿倍野区）などがある。地域寄席については、「ぐるーぶ寄席あつめ」の機関誌『寄席ばや誌』（地域寄席会場で配付、平成5年4月現在195号）に記事が載る他、『びあ』などの情報誌にもスケジュールが載ることがあり、参考になる。ただし、これらに予告される演目・演者はしばしば変更されるのが現実で、実際の演目については、各寄席ごとの記録によるしかないと思われる。
- 23 大阪府からの助成金については、旭堂南陵「上方講談と助成金騒動」（『講談研究』313、1980）がある。
- 24 椎名靖「読み物講談の足跡」2（『講談研究』151、1966）。
- 25 ちなみに、落語の「佐々木裁き」はこの三代目松鶴の作だという（桂米朝「二代目旭堂南陵聞き書」）。
- 26 この表現は、南海氏による。
- 27 「三代記」28頁参照。
- 28 この種の雑誌については、本文中に掲げた旭堂小南陵および椎名靖の論文の他、肥田皓三「大阪落語の速記本」1-8（『上方芸能』51-54、56-59、1977-78）がある。
- 29 中之島図書館については、大部の蔵書目録が以前から刊行されているが、速記本の収集が始められたのが最近のため、検索にはカードによる方が便利である。

【資料】上方講談師名鑑

- 旭堂 南 陵 大正6年生（大阪市）。実父二代目南陵に師事。17才で南海の芸名で初舞台。昭和15年二代目小南陵襲名、真打。41年南陵襲名。
- 小 南 陵 昭和24年生（大阪府堺市）。近畿大学在学中の43年から南陵に師事、47年に正式入門し南右。53年三代目小南陵を襲名し、真打。平成元年、参議院議員（兵庫選挙区、社会党）。農学修士（大阪府立大学大学院）。
- 左 南 陵 昭和24年生（大分県佐伯市）。45年芸能界入り。ボーイズなどを経て、47年に入門し南京、50年南鏡。51年から東京へ行き、一龍斎貞水の預かり弟子。55年帰阪後、左南陵と改名し、真打。
- 南左衛門 昭和29年生（兵庫県三田市）。近畿大学在学中の51年に「講談道場」に参加、同年入門し南学、62年南左衛門を創名し、真打。平成2年から、劇団リリパットアーミーにも参加。
- 南 鱗 昭和25年生（大阪市）。50年に「講談道場」に参加、51年に入門し南幸、すぐに南光と改名。63年南鱗を襲名し、真打。母方の曾祖父は明治時代の講談師の西尾東林。
- 南 北 昭和30年生（広島市）。昭和54年に横山ノックの門下で漫談、同年「講談道場」に参加、55年南陵に入門し、南北。平成3年真打。
- 南 啓 昭和27年生（三重県名張市）。57年に「講談道場」に参加、58年入門し、南啓。（休業中）

総合研究所所報

- 南 華 昭和38年生（大阪府貝塚市）。梅花女子大学在学中の56年に「講談道場」に参加、60年入門し、南華。平成元年南左衛門と結婚。
- 南 海 昭和39年生（兵庫県加古川市）。大阪大学在学中の62年に「講談道場」に参加、平成元年入門し、南海。卒業論文の題目は「講談、落語速記本隆盛前夜における伊東専三」。
- 小南美 昭和52年生。旭堂小南陵長女。60年初舞台。
- 若小南陵 昭和55年生。旭堂小南陵長男。61年初舞台。
- 南太平洋 昭和48年生（大阪府箕面市）。平成3年「講談道場」参加。同年、小南陵に入門し、南太平洋。

その他に、南陵に入門したが、後に廃業した者に、南花、南桜、南蝶、南昇、南扇、南洛（入門順）がいる。ただし、南蝶は内海かっぱに入門して、女放談「内海英華」として、また寄席下座の演者としても、桑原あい子の名前で活動している。

参考文献

- 青木繁・神沢和明編：南陵師匠聞き書（上方芸能113 [1993] から連載中）
- 桂米朝：二代目旭堂南陵聞き書（『上方落語ノート』、青蛙房、1987）
- 桂米之助：不振の講談はよみがえるか—まず原点に戻ろう（上方芸能40、1975）
- 旭堂南右（現小南陵）：講談—浪花節と落語のはざまの（上方芸能39、1975）
- 旭堂小南陵：上方講談と大阪の出版文化 1—13（上方芸能83—95、1984—87、未完）
- 旭堂南陵（二代目）：大阪講談界今昔（講談研究昭和28年6月号～29年1月号、後単行本『講談研究』に収録）
- 旭堂南陵（三代目）：明治の上方講談師 1—44（上方芸能7 [1969] から連載）
- 佐野孝：『講談五百年』（鶴書房、1943）
- 椎名靖：読み物講談の足跡 1—7（講談研究150—6、1966）
- 笑福亭松鶴：戦後上方落語界の裏話 1—4（上方芸能7—10、1969）
- 関根黙庵：『講談落語考』（雄山閣、1967再刊）
- 田邊南鶴編：『講談研究』（編者刊、1965）
- 肥田皓三：大阪落語の速記本 1—8（上方芸能51—54、56—59、1977—78）
- 樋口保美：明治の大衆芸能史 大阪朝日新聞にみる動き（上方芸能55 [1978] から連載）
- 森田憲司：平成上方講談紀事 1—10（上方芸能104—113、1990—93）
- 森田憲司：元気な上方講談界（上方芸能115、1993）
- 吉沢英明編：『講談明治編年史』（編者刊、1979）
- 吉沢英明：『大衆芸能資料集成』第5巻解説（三一書房、1981）
- 『上方芸能』6号・特集「危機に立つ大阪の講談」（1969）
- 今日の庶民精神は反映しているか 上方芸能編集部
- 張り扇一匹 南陵師匠を“最後の殉教者”にはしてはならない 一色宗彦
- 人間の欲と恐怖を主題に 講談の描こうとするもの 旭堂南陵
- 講談—大阪の不毛性 戦前的大阪講談 宇井無愁
- *雑誌『上方芸能』には、そのおりの時評など、ここに掲げた以外にも上方講談界について知る上で有益な文献が多く掲載されている。とくに27号（1973）から毎号連載されている「白牡丹図」は、詳細な上方芸能の記録として、本稿作成の上でぜひ参考とさせていただいた。

追 記

本稿提出後に、上方講談界に起こった主な出来事に、南陵の芸能生活60周年を記念する会として、11月17日にトリイホールで、「旭堂南陵を聞く会」が開かれたことと、小南陵に弟子入りした南真が、12月にデビューし、上方講談の現有勢力は13名となったことがある（平成6年1月から南十字星と改名の予定）。追記しておきたい。なお、南真も、講談道場の出身である。

「オレンジ講談」は、オレンジルームの閉鎖にともない、平成6年2月で幕を閉じ、他の会場で開かれることとなった。